板書例

1　城崎温泉に着く前

・電車に跳ね飛ばされてけが
↓後養生に一人で城崎温泉へ

・脊椎カリエス＝致命傷
①二・三年で出なければ後は心配いらない。
↑もう三年以上になる（P二〇六）
②三週間以上―我慢できたら五週間くらいいたい
↑三週間いて、自分はここを去った。（P二〇六）
☆語り手が振り返って語っている構造（＝入れ籠型構造）となっている

⇦

読解のカギ
なぜ三週間で去ったのか？
何を我慢できなくなったのか？

2　城崎温泉に着いて

主人公の様子
・頭はまだ何だかはっきりしない
物忘れが激しくなる
⇔しかし（同時に）
気分は近年になく静まる
落ち着いたいい気持ち
↓頭（身体）は不調だが、気分（精神）は好調。

・よくけがのことを考えた。
沈んだこと・寂しい考え
⇔しかし（同時に）
静かないい気持ちがある。
一つ間違えば死骸になっていた。
青い・冷たい
祖父や母の死骸とも何の交渉もない
↓それは寂しいが、恐怖させない。

⇦

死を身近に感じ始める。
ロードクライブのような使命感を感じたかったが、心は静まってしまった（使命感との距離感）。
「何かしら」（＝言葉にできない）死に対する親しみを覚える。

⇦

主人公は死を「寂しい」ものだが同時に「静かな」もの（＝いい気持ちのもの）ととらえ、「何かしら」の親しみを覚えている。

3　蜂を見て

・蜂を見ての直接の感想
生きている蜂＝いかにも生きているもの
忙しくはい回る
拘泥する様子はない
死んだ蜂＝全く動かずに転がっている
↓いかにも死んだもの
いかにも静かな感じ
主人公の感想が強調されている

⇦主人公は生きている蜂の姿と死んだ蜂の死骸とを比較（「せわしくせわしく……静かである。」（P 一九九・14）して、死んだ蜂に「全く動かず」「静かな感じ」を覚え、「その静かさに親しみを感じ」ている。

・蜂を見て連想したこと
「「殺されたる范の妻」を書こうと思った。」
＝
「しまいに殺されて墓の下にいる、その静かさを書きたいと思った。」

⇦主人公は蜂の死骸を見て感じた「静かさ」への「親しみ」を繰り返しながら、「何らか」ではなく「書きたい」と具体化させている。

4　ねずみを見て

・ねずみを見ての直接の感想
ねずみ＝必死に逃げ回る（＝「動作の表情」）
↓「自分は寂しい嫌な気持ちになった。」

※ここでは同時に「静かないい気持ち」にはならない。

⇦主人公は死ぬ前の動騒をくりひろげるのを見て、死を「寂しいが、同時に静かないい気持ちのもの」から「寂しい嫌な苦しみと、その後の静かさ」というように考え直している。

・ねずみを見て連想したこと
自分がけがをしたときのことを連想

←両方（「気分で願う」＝静かな死と、「実際」＝死ぬ前のねずみのような動騒）が本当。

⇦終始静かな死を迎えようと、終始ねずみのように騒ごうと、「どちらでもよ」く、「それはしかたのないこと」と考える。

5 **桑の木の葉を見て**

・「角を一つ一つ先へ……そわそわとさせた」で、秋の雰囲気が強調される。

「いつまで行っても、先の角はあった」

5 と 6 は時間・場所が連続した場面

6 **いもりを見て**

・いもりを見ての直接の感想

いもりを驚かせようと石を投げる。

偶然石が当たり、偶然いもりは死んでしまう。

⇦ 主人公はいもりが死んでいく過程を見て「かわいそうに思うと同時に、生きものの寂しさ（＝生死が偶然で左右されること）をいっしょに感じた。」

・いもりを見て連想したこと

寂しい気持ちで温泉宿へ帰る

蜂：土の下に死骸が行く？

ねずみ：海岸に死骸が行く？

偶然の差

自分：今歩いている

⇦ 主人公はいもりが死んでいく過程を見て、生と死のつながり、連続性（偶然の差）を意識した。

7 **城崎温泉から帰って**

「三週間いて、自分はここを去った」

→なぜ三週間で切り上げた？

答　我慢できなくなったから。

→何に我慢できなくなった？

まとめとして

①この作品のテーマは何？

答　死と生は偶然の差でしかないという死生観。

②1～7の意味段落を、作品のテーマを意識してまとめるとしたらどうまとめられる？

答　第1段：1・2
第2段：3
第3段：4
第4段：5・6
第5段：7

③主人公は何に我慢できなくなったのだろう？

答　自分が死と向き合う場であるという重さに我慢できなくなった。